慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	シンポジウム : 「ことばの力を育む」授業の展開 : みんなで探ろう、小学校英語活動への対処法
Sub Title	Keio University symposium on language teaching : how to develop students' metalinguistic awareness through foreign language activities in elementary schools
Author	永井, 敦(Nagai, Atsushi)
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム人文科学分野論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2009
Jtitle	活動報告書 Vol.3, (2009.) ,p.32- 32
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	第2章 : シンポジウム等の活動報告
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002002-20100300-0032

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

8 シンポジウム：「ことばの力を育む」授業の展開 ——みんなで探ろう、小学校英語活動への対処法——

Keio University Symposium on Language Teaching: how to develop students' metalinguistic awareness through Foreign Language Activities in elementary schools

開催日　2009年12月19日
企　画　大津由紀雄（言語と認知班）
講演者　斎藤菊枝（埼玉県立大宮東高等学校）、末岡敏明（東京学芸大学附属小金井中学校）、三森ゆりか（つくば言語技術研究所所長）、森山卓郎（京都教育大学）、寺尾康（静岡県立大学）、窪園晴夫（神戸大学）

去る2009年12月19日に慶應義塾大学グローバルCOE言語教育シンポジウムが開催されました。シンポジウム当日まで申し込みが相次ぎ、教室はほぼ満員の大盛況で、冬の寒さを忘れるほど会場は熱気に満ちていたのが記憶に新しいところです。

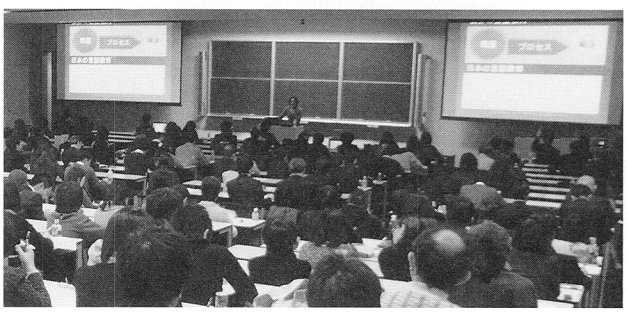
今回のシンポジウムでは、「理論」に裏打ちされた言語教育の「実践」がその主要なテーマでした。これまで、言語教育プロジェクトでは、その先導的立場にある大津由紀雄教授（言語と認知班・慶應義塾大学）を始め、各研究分担者は様々な形で、日本における言語教育の重要性を訴えて来、例えばウェブ上で、プロジェクト言語教育の活動の経過報告という形で、その研究内容を間接的に伝えてきました。しかしながら、では実際にその言語教育という理念を、具体的な授業の形に落とし込む場合はどうすれば良いのかということに関しては、機会に恵まれず、どうしても「理論」の部分に議論が偏りがちでした。そのため、今回のシンポジウムでは「実践」を前面に押し出し、現場経験の豊富な教員が行った授業ビデオの放映や、具体的なワークショップが行われました。

今回のシンポジウムでは、授業実践ビデオの放映を通して、現職の先生方には「ことば」の授業における、子どもたちの無限の可能性をその目で見ていただき、そして、その後に続く、各授業者の授業解説、さらには、ことばの専門家、つまり言語学者による、授業の背後に隠された原理の解説によって、「言語教育」とは何かを、まさに「理論」と「実践」の両面から理解していただきました。シンポジウム後のアンケートは、「言語教育の具体的な姿が分かり、その可能性を感じた。」という言葉や、「実践がしっかりとした理論に裏打ちされているので、説得力があると思った。」など、実際に多くの先生方の心を揺さぶることができたことを示しています。

我が国の新学習指導要領によって必修化された、小学校高学年での外国語活動は、実質的に予算もなく、方法論もないというある種の危機的な状況に置かれています。しかし、その危機というのは、一体誰にとっての危機なのでしょうか。外国語活動を、きちんとした教育政策として考えられる前に導入したことで、現在その対応に追われている行政でしょうか。それとも、方法論がなく、明日の授業をどうしようと悩んでおられる現場の先生方でしょうか。いや、違います。それは、日本の未来を背負う子どもたち自身にとっての危機に他なりません。彼らには何の罪もなく、今回のような事態になってしまったのは、ひとえに国の教育政策に対する浅慮、それはつまり、教育政策に携わる人々の「ことば」の重要性への意識の低さが原因ではないでしょうか。福澤諭吉先生が正しく述べているように、「教育は国家百年の計」です。グローバル化経済への対応のための早期外国語教育という、恐ろしく単純な議論、そして何よりも目先の利益を重視した視点によって、日本の学校教育が考えられていること自体、大きな問題と言えるでしょう。

こんな状況下において、現場の先生方に期待したいことは、外国語活動は誰のための活動であるかということをもう一度考えていただき、その上で、例えば、決まり文句としての英語表現を次から次に教え込むのか、あるいは、外国語活動を言語教育として捉えなおし、「ことば」の授業を通じて、子どもたちにことばの大切さに気づかせるのかなど、ご自身で判断を下すということです。

「ことば」は、深く、面白く、人間にとって大切なものです。この「ことば」に対する意識を高める教育は、こどもたちの将来の学びを支えるでしょう。また、今回の実践で明らかになったように、ことばの授業では、子どもたちは夢中になります。そして、これらの授業は、きちんとした学問的基盤によって裏付けられています。あとはこれをカリキュラムとして体系化し、教材を開発していくということですが、これについてもすでに準備は整ってきております。今後、カリキュラム・教材ということで、言語教育プロジェクトにおいて、現場にいらっしゃる先生方からのフィードバックがとても重要な役割を担ってきますが、子どもたちのための新たな外国語活動、つまり「子どもたちのための言語教育」の創出に向けて、現場と研究者が一体となって研究プロジェクトが進められていくことが期待されます。

（永井　敦）

The Keio University Symposium on Language Teaching was held on December 19, 2009. It mainly focused on how to develop the "metalinguistic awareness" of children, an ability which promotes their effective language use. We had almost 300 participants, who were mostly school teachers. In this symposium, we demonstrated that our theory of language teaching can be put into practice in classroom situations. For example, the participants observed the practices through a video and attended some workshops. Finally, they seemed to have understood not only the theory of language education but also the concrete methods of it. So from now on, we can expect them to develop their own practices and provide us with feedback.